

防蟲科學

第一號

羊毛の防蟲

共一

財團法人防蟲科學研究所

京都帝國大學內

昭和十二年六月

防 蟲 科 學

第 一 號

羊 毛 の 防 蟲
共 一

財團法人防蟲科學研究所

京 都 帝 國 大 學 內

昭 和 十 二 年 六 月

目 次

| | | |
|------------|---------------------------------------|---------------|
| 發刊の辭 | 京都帝國大學 總長 財團法人防蟲科學研究所 理事長 | 理學博士 松井 元興…1 |
| 羊毛の新防蝕劑に就て | 京都帝國大學 教授 財團法人防蟲科學研究所 理事 | 農學博士 武居 三吉 …3 |
| | 京都帝國大學 化學研究所 財團法人防蟲科學研究所 研究囑託 | 農學士 多田 康二 |
| 毛織物の害蟲に就て | 京都帝國大學 農學部 昆蟲學研究室 財團法人防蟲科學研究所 研究囑託 | 山田 保治…9 |

編輯後記

財團法人防蟲科學研究所總則及役員

のである。

「ロテノーン」を主剤として処理した毛布は、其濃度が増加するに従つて蝕害量が次第に少なくなつて行き、「ロテノーン」 $\frac{2.5}{1000}$ （圖版第七第九號）以上處理のものに於ては、殆んど全く蟲の蝕害を認むることが出来なくて、完全に防蝕効果を發揮して居ることを認められるのである無處理のものは始めから蝕害されて居る。

市販品「X, Y, Z」の三種は何づれも蟲の蝕害を受けて居るが、其程度はそれぞれ違つて居て、防蝕加工せられたることを伺はれる。特に「X」の如きは防蝕處理剤のために、著しく蟲の蝕害を制限されて居ることを明らかに認めることが出来る。此は防蝕剤濃度の低かりしためか、或は其加工法の何所かに缺陷があつたために、僅かながらも蟲の蝕害を受けるに到つたのではなからうかと思はれる。

此試験は、昭和十一年九月二十日より、同年十一月十日に到る、五十二日間に涉つて、武居博士の研究室と余が在勤せる昆蟲學研究室との兩所に於て行ひたるものにて、其試験成績は兩所共に殆んど同様の結果を得た。此所には其大要を記録するに止めたのである。

之を要するに防蝕試験一、二共に「ロテノーン」を主剤とせる防蝕剤の處理量が適當で、其加工法に誤ちさへなければ、殆んど完全に防蝕効果を發揮することを認むるのである。記載を終るに當りて、松尾薫四郎氏が寫眞につきて多大なる助力をせられたる厚意に對しては深く感謝する處である。「終り」

編輯後記

本誌の選簽「防蝕科學」は理事長松井元興博士の揮毫にかゝる。本誌は年一回の發行とし、別に臨時研究特別報告を出版する豫定である。本誌裏表紙中央の記號、「蟲研」の輪郭は「ヒメマルカツラブシムシ」の成蟲を型どつたのである。（山田記）

財団法人防蟲科學研究所總則及役員

(昭和十二年二月十九日設立認可)

總 則

- 第一條 本法人ハ財団法人防蟲科學研究所ト稱ス。
- 第二條 本法人ハ防蟲科學ニ關スル研究ヲ獎勵シ其發達ヲ圖ルヲ以テ目的トス。
- 第三條 本法人ハ前條ノ目的ヲ達スル爲左ノ事業ヲ行フ。
- 一 防蟲科學ニ關スル研究者若ハ團體ニ對シ研究資金ノ交付。
 - 二 防蟲科學ニ關スル研究及調査。
 - 三 其ノ他第二條ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業。
- 第四條 本法人ハ事務所ヲ京都市左京區吉田町京都帝國大學内ニ置ク。

役 員

| | | | |
|-----|---------------------|------|---------|
| 理事長 | 京都帝國大學總長 | 理學博士 | 松 井 元 興 |
| 理 事 | 京都帝國大學教授 化學研究所々長 | 工學博士 | 喜 多 源 逸 |
| 理 事 | 京都帝國大學教授 | 農學博士 | 春 川 忠 吉 |
| 理 事 | 京都帝國大學教授 | 農學博士 | 武 居 三 吉 |
| 理 事 | 株式會社小林政治商店社長 | | 小 林 政 治 |
| 理 事 | 衆議院議員 | | 中 山 福 藏 |
| 監 事 | 京都帝國大學書記官 | | 岸 興 詳 |
| 監 事 | 株式會社小林政治商店支配人 | | 片 畑 敬 三 |
| 主 事 | 京都帝國大學會計課長 | | 岸 田 源 壽 |
| | | | 以 上 |

昭和十二年六月二十日印刷
昭和十二年六月廿五日發行
昭和十四年十一月廿三日三版
昭和十五年十一月一日四版

定價 55.00

編輯兼發行者 武居三吉

京都市左京區北白川退分
京都大學農藝部內

印刷者 石井喜太郎

京都市下京區東九條山王町三八

印刷所 大寶印刷株式會社

京都市下京區東九條山王町三八

發行所 財團法入防蟲科學研究所

京都市左京區青田町
京都大學內

